いまのいまじゅりぃ

活動報告

第４回全国大会が開催されました。

＊大会詳細は以下の通りです。総会については別紙をご覧下さい。

（日時）2007 年３月 10 日（土）11 日（日）　／　（場所）姫路市立美術館（兵庫県姫路市）

（内容）

第１日目（3 月 10 日）

＊常任委員会［於：姫路市立美術館会議室］

＊総会［於：姫路市立美術館講堂］

＊シンポジウム［於：姫路市立美術館講堂］

＜テーマ＞**「抒情はいかにして可能か―絵画・文学・音楽を横断して―」**

パネリスト: 網干　毅 氏（関西学院大学）

山田　優子 氏（金沢湯涌夢二館）

小嶋　洋子 氏（高畠華宵大正ロマン館）

ゲスト　:太田　孝彦 氏（同志社大学）

司会　:岸　文和 氏（同志社大学）

＊懇親会

第２日目（3 月 11 日）

第 10 回研究会［於：姫路市立美術館講堂］

①研究発表「旅に誘う民謡―安来節の声と風景」（秋吉康晴氏／神戸大学大学院）

②研究発表「明治・大正期における一蝶イメージの意味作用」（亀井祐美氏／同志社大学大学院）

③研究発表「『製品』としての『文学作品』―尾崎翠とその周辺にみる―」（佐々木孝文 氏／鳥取市教育委員会）

④研究発表「近代における茶の湯のグラフィズム」（宮嶋　幸子 氏／奈良芸術短期大学）

＊展覧会解説（田島　奈都子 氏／姫路市立美術館）

＊姫路市立美術館見学会（「大正レトロ 昭和モダン ポスター―印刷と広告の文化史―」）

活動予定

①　今年度の研究会

＊第 11 回研究会

（日時）2007 年７月 21 日（土）　／　（場所）坂の上の雲ミュージアム研修室（愛媛県松山市）

（内容）研究発表／近隣の美術館博物館見学（坂の上の雲ミュージアムほか）

＊第 12 回研究会

（場所）関東近辺　（日時）10-11 月

②　『大正イマジュリィ事典』（仮称）の出版準備

＊編集委員会発足と始動

投稿者／発表者の募集

①　**学会誌『大正イマジュリィ』第３号の投稿論文を募集しています。**

詳細は編集事務局（関西学院大学文学部　加藤哲弘研究室：0798-54-6037）までお問い合わせ下さい。

②　秋の研究会での発表者を募集しています。詳細は学会事務局までお問い合わせ下さい。

《会員消息とイマジュリィ情報》

① 西川貴子会員より

・2007年4月（論文）＜裁ききれぬもの＞への眼差し–泉鏡花「政談十二社」試論–

・2007年3月　国木田独歩「武蔵野」解説（『文学で考える　〈日本〉とは何か』双文社）

② 熊田　司会員より

・４月４日から、産経新聞（大阪本社版）では毎水曜日夕刊に、ヴィジュアル的に美しい装丁本などを紹介する「古書さんけい堂–関西の出版 明治から昭和」の連載が始まりました。大正イマジュリィ学会副会長・熊田司と、帝塚山学院大学教授・宮内淳子氏、画家・林哲夫氏が交互に執筆します。

・「匐蝠書牢収監**K氏**蒐囚品展」

会期：2007年5月14日（月）ー26日（土）／20日は休み／11：00–18：00

会場：ＨＡＺ　（芦屋市東芦屋町3–7／（tel）0797–38–8411 ）

趣旨：此度第参回《これくたあ・ひろえい壱展ぷろじぇくと》に託けて、ご存知**K**氏蒐囚品のサワリを衆目に曝すことと相成りぬ。深き獄中より引き出したる者共なれば、もとより華美の粧ひもあらじ。されど諸賢の眼力にして、孰れ違はぬ礫石の混淆中に一玉なりとも見出し給はば、是に過る欣びはなし。毎土曜午后には、匐蝠書牢名主も場中蟠踞の筈。ご来賀ご高覧を乞ふ。

③ 川嶋伸行会員より

①アンダーグランド・ブックカフェ「大正イマジュリィの絵葉書たち」

時：５月２５日（金曜）–２９日（火曜）

所：東京古書組合会館２Ｆ　03–3295–2828／ＪＲ御茶ノ水・地下鉄神保町下車５分

②「小林かいちと絵葉書の世界」

時：７月２１日（土）–９月２日（日）

所：小杉放庵日光市美術館　0288–50–1200

④ 岸本健治会員より

国書刊行会では下記の書籍を五月下旬に刊行いたします。

『小林かいちの世界 まぼろしの京都アール・デコ』（山田俊幸・永山多貴子編）

＊近年とみにその特異なデザインが注目されている大正期の謎の画家、小林かいち。

三百点に及ぶカラー図像で、その繊細にしてゴージャスな「京都アール・デコ」の宴を再現！

AB判・並製カバー・定価２９４０円

★ご予約いただいた方には、送料無料・代金引換便にてお送りいたします。

【お問合せ先】株式会社 国書刊行会

〒174–0056　東京都板橋区志村1–13–15　（TEL）03–5970–7421（FAX）03–5970–7427

その他

①　学会後援／協力の展覧会やイベントを紹介します。

「花園少女展～かいち・フォーゲラー・華宵～」

（場所）高畠華宵大正ロマン館［愛媛県東温市／089–964–7077］

（会期）2007年4月6日ー6月10日（水・木は休館／但し5月3日は開館）

（後援）大正イマジュリィ学会

「小林かいちと大正イマジュリィの絵葉書たち」

（場所）東京古書組合会館２Ｆギャラリー（東京都千代田区神田小川町3–22／03–3293–0161）

（会期）2007年5月25日ー29日

（協力）大正イマジュリィ学会

大正いまーじゅ

（リレーエッセイ／第１回）

『大正イマジュリィ事典（仮称）』の刊行に向けて

編集委員会事務局
岸　文和（同志社大学）

三月一〇日に開かれました常任委員会で、『大正イマジュリィ事典（仮題）』の編纂を学会活動の一環として行うことが決定され、同日の全国大会総会において、編集委員会委員の選任、事務局の設置を含めて承認されました（詳細については「大会議事録」をご参照下さい）。編集委員会は、今後、出版社の選定、体裁（判型・頁数など）・価格・出版部数の交渉、項目の選定、執筆者の決定などを、順次、行ってまいります。ただし、最も重要な課題が、「大正イマジュリィ」という概念の外延と内包について、編集委員が（会員の代表として）共通の認識をもつことであることは言うまでもありません。とはいえ、このことが至難の業であるということもまた、言うまでもないことでしょう。編集委員会では、しばらくの間、このことについてじっくり議論しようと思っていますが、さしあたり、編集事務局の私見として、「事典／辞典」の項目（事項／人名）選定の基準について、次のような可能性があることを、指摘しておきたいと思います。

（1）「イマジュリィ」とは、最も広い意味では、「視覚文化（visual culture）」と同義である。では、「視覚文化」とは何か。例えば、ジョン・ウォーカー＆サラ・チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門』（晃洋書房、二〇〇一年）によると、それは「人間の労働と想像力によって生産された物理的な制作物、建造物、図像、そして時間的なメディアやパフォーマンスのうち、美的、象徴的、儀式的、イデオロギー的、政治的な目的をもち、かつ／あるいは実用的機能を果たし、ある程度視覚に訴えるもの」のことである。したがって、この意味における「イマジュリィ」には、いわゆる「ハイアート」としての「美術」（建築／彫刻／絵画）をはじめとして、工芸／デザイン、写真／マンガ、さらには、映画／テレビ／イベントなども含まれることになる。
（2）しかし、高畠華宵大正ロマン館ホームページに掲載されている「学会の趣旨と目的」などによれば、「イマジュリィ」とは「イメージ図像」（視覚イメージ／図像／画像）のことで、具体的には、「夢二や華宵などの挿絵や表紙絵、アールデコ風のポスター、自由なファッション」などが言及されていることから、もう少し狭い意味で使用されていることが分かる。広義の「視覚文化」から、展覧会に出品されて鑑賞される一点モノの「芸術作品」に代表される「ハイアート」を削除したもの、というのが、消極的に定義した場合の「イマジュリィ」の意味である。
（3）この意味における「イマジュリィ」概念を、積極的に定義すると、それは、「視覚文化」のうち「ローカルチャー」あるいは「サブカルチャー」に属するもの、もう少し言えば、大衆的メディアの世界において大量に流通して消費される「複製図像」に代表されるものということになるだろう。
（4）したがって、『大正イマジュリィ事典（仮称）』が収録すべき項目は、「大正」という明治と昭和に挟まれた時代に、主として、大衆的メディアの世界において大量に流通し消費された「複製図像」に関するものということになる。具体的に言うなら、次のようなジャンルに属するモノが想定されるだろう。すなわち、装幀（雑誌表紙絵を含む）、口絵、挿絵、コマ絵、カット、写真（グラビア写真・報道写真など）、広告（雑誌、新聞などの）、雑誌付録（カード・シール・バッチなど）、画集、写真集、楽譜、教科書、ノート、版画（新版画・創作版画など）、漫画、ポスター、チラシ（フライヤー）、引き札、パンフレット、カレンダー、地図（鳥瞰図など）、絵はがき、便箋、封筒、商品ラベル（マッチ・酒瓶など）、商標、商品パッケージ（化粧品・煙草・薬など）、レコードジャケット、包装紙、ぽち袋、双六、紙芝居、しおり、折り紙（千代紙）、メンコ、ぬりえ、着せ替え人形型紙、切手、扇子、団扇などである。もっともこれらは、支持体の点から言うなら、もっぱら紙媒体（二次元）として流通する図像であって、そのような限定をはずすなら、創作人形、服飾デザイン（着物、浴衣、半襟、帯など）、染織デザイン（風呂敷、のれん、テーブル掛け、手ぬぐい、リボン）など非紙媒体として流通する図像もまた、歴とした「イマジュリィ」とみなされる。

（5）もっとも、「イマジュリィ」を、このような静止的・モノ的な「複製図像」だけに限定する必要はない。ウインドウ・ディスプレー、映画、演劇、芸能（能・狂言・茶道・華道などを含む）、大道芸などといった動的・上演的な表象をも視野に入れるべきである、という議論も、当然の事ながら、予想される。
（6）いずれにせよ、モノ的であれ、上演的であれ、一般的に「視覚イメージ」と呼ばれるものを、生きたものとして理解するためには、それらを、孤立したモノ／上演それ自体として把握するのではなく、常に、一定の「状況」の内部で機能するメディアとして把握する必要がある。言い換えれば、「視覚イメージ」というものは、それを発注する注文主（版元・広告会社・宣伝部・土産物店・官公庁など）、生産に関わる制作者（画家・図案家・デザイナーなど）、流通に関わる仲介者（書店・古書店・デパート・土産物店・博覧会・見本市・展覧会など）、消費に関わる受容者（コレクター・好事家・愛好家など）とのネットワークの網目において、また「視覚イメージ」がそれを対象（主題）として表象するところの「大正」という時代の歴史的・社会的・文化的コンテクスト（都市・交通・流行・風俗・慣習など）との関係性において把握する必要がある。『大正イマジュリィ事典（仮称）』が、注文主、制作者、仲介者、受容者といった人間や制度に関する項目を収録し、「大正」という時代の歴史的・社会的・文化的コンテクストに関わる項目をも収録しなければならないのは、このためである。
（7）ただし、項目選定の基準として最も重要なことは、当の項目（事項／人名）が「大正」という時代を特殊・固有なものとして理解するうえで、どの程度、象徴的な価値があるか、ということに尽きるように思われる。

編集委員会は、編集方針について真剣に議論を行う予定ですが、『大正イマジュリィ事典（仮称）』は、あくまでも個々の学会員が主体となって編纂されるべきものです。会員各位におかれましては、このような議論に積極的に参加するとともに、個々の事項や人物に関する詳細な情報を提供し、隠れている参考文献を指示し、さらには、執筆の労をお取り下さいますよう、お願いする次第です。

事務局から

① 住所や所属が変更になられた方は、学会事務局までお知らせ下さい。
② ニュースレターは季刊を予定しています。次回は 8 月上旬発行予定です。会員の皆様からのイマジュリィ情報やご消息をお寄せください。
③ ニュースレターは次号からはメール配信を予定しています。メールアドレスをまだ学会事務局にご通知でない方がいらっしゃいましたら、ご連絡ください。

「大正イマジュリィ学会」ニュースレター（vol.1）
いまのいまじゅりぃ
（発行）「大正イマジュリィ学会」
（編集） 高畠華宵大正ロマン館(学会事務局)
愛媛県東温市下林
(phone) 089-964-7077／(fax) 089-964-7222
(e-mail) museum@kasho.org